

Significance of Art Therapy in Day Care Services for Back-to-Work Rehabilitation in Men with Atypical Depression

Michiru Arai*

This research looked at the process of aid with art therapy in day care services for back-to-work rehabilitation in men with a leave of absence because of atypical depression, in order to explore the beneficial effects of aid with art therapy and ideal aid for back-to-work rehabilitation in these men. While men are said to have difficulty knowing and expressing emotions, our explorations suggested the following four effects from aid with art therapy in men with a leave of absence: (1) the client's potential can be found in artwork; (2) the client's solid experience of receiving all unacceptable emotions as important ones in a group will lead to self-affirmation and self-acceptance; (3) the client can express resolutions and restore the sense of reality in a more flexible way than before through artwork; and (4) the client can reflect on repressed pain or the experience of loss in the past or present difficulties onto the artwork in a safe manner to build a story, and this constitutes the process of reviewing the basic identity in relation to labor. The research also demonstrated another important point in the aid: (5) aid providers should take a relative view of the client's professional identity and assist the client in finding his individuality and desires so that he can re-select his future life. In summary, emotional expression via a series of art therapy sessions was found to be effective for self-insight and the restoration of a sense of reality to lead to self-determination and a return to work.

Key words : atypical depression, day care services for back-to-work rehabilitation, art therapy, anxiety

* Kokoronokaze Clinic, Funabashi SF building third floor, 1-26-2 Honcho, Funabashi-shi, Chiba, 273-0005 Japan.

症例研究

音楽療法におけるエロスの重要性

荒川有加*

*育和会介護老人保健施設ひまわり

Importance of Eros in Music Therapy

Y. Arakawa*

* Ikuwakai Himawari Geriatric Health Service Facility, Osaka

I. はじめに

西田¹⁴⁾は、「最も具体的なる経験の事実に近い者が真理であると思う」と述べたが、一見平凡に見える事例の中に普遍や真実があるとも言われる。筆者はA氏との音楽療法セッションを通じて、非常に大きなインスピレーションを得ていた。この研究は、筆者がA氏と共にした時間を振り返り、その中で何がどのように起こっていたと感じ、考えていたのか、またそれを明らかにすること意識化することで、筆者にとってセラピーとは何か、セラピーによって、セラピーを通して、何を実現しようとしていたのかという核心的な問題に迫ろうとする試みである。音楽には様々な特性があり、多様な効果を持つと考えられているが、セラピストがそれらをどのようにとらえて行っているのかによって、実際に行われるセッションには相違が現れてくると考える。意識的に、無意識に、筆者が何をどのように考えセッションを行っていたのか、そして何がこの症例に作用していたのかをこの論文で見極めていきたいと考えている。

II. 症 例

A氏, 男性。大陸の日本領で生まれた。幼い頃

は父親が馬車の運輸業をしていたため、経済的に豊かな生活をしていましたが、敗戦と同時に、一家は財産をすべて置いて日本へ帰国し、その後は苦労の連続だった。集団就職の後は、結婚し、真面目によく働いた。お酒とカラオケが非常に好きで大変社交的だったが、酒の席では少々エッチな話をして度々周囲を楽しませていた。音楽は流行歌の歌唱のほか、クラシックギターの演奏や浪曲をたしなむなど、幅広く愛好していた。曲がったことが嫌いで、やさしい性格だった。(以上夫人談)

60歳代後半で介護老人保健施設に入所した。(入所当時は要介護5, 自立度C2, 認知度I, その後70歳代で要介護5, 自立度C2, 認知度III a) 体重約38kg, 既往歴は脳梗塞, 神経因性膀胱, 左水腎症, 尿路感染症, 下腿蜂窩織炎, イレウス, 慢性便秘症である。

上下肢左右共に筋力低下があり, 車椅子使用。指・肘関節・肩関節に拘縮がある。視力・聴力は日常生活に支障はない。食事はスプーンを使い見守り・一部介助であるが, むせ込みはない。排泄・更衣・移動は全介助, 床上にてオムツ交換をしており, 尿意便意はない。後にバルーンカテーテル留置となる。移動や体交時にヒステリックに痛みを訴え不穏になることがある。精神科を受診し, 以来服薬している(塩酸チアプリド25mg,

Key words : 音楽療法, エロス, むすび, 聖俗, 全体性

エチゾラム 0.5 mg)。言葉のセクハラが多いとケアプランに記してあった。実際、女性介護職員がA氏の言葉のセクハラを不愉快なものであると訴えていた。傷みの訴えがひどく理学療法は行っていない。

やせ細ったA氏が、顔の辺りで両手の指をもじもじさせて、何やら恥ずかしそうに臥床している姿が、筆者が初めて見た時のA氏の様子であった。

Ⅲ. 個別音楽療法を始めた経緯と目的 (回数は#で記す)

入所1カ月半後、不穏の軽減・他入所者との交流・残存能力の賦活を目標に、男性3人の小集団音楽療法のメンバーとしてアセスメントセッションを2回行った。歌唱能力が高く、セッション中は上機嫌であったが、誘導時には痛みの訴えがひどく、「姉ちゃん、ええことしよか」など性的な言葉が度々あった(今後これを筆者は“h”と記す)。アセスメントセッション#2には、筆者が歌いかけると黙って涙を浮かべ、「ありがとう」「毎日でも来て」と言う。その後、翌月の施設行事に、男性5人グループで出演することになる。度々「恥ずかしい」と言ってシャイな様子を見せるが、活気がある。当日はスーツにネクタイをしめて立派に歌を披露した。元々予定していた3人グループが、諸事情で解散となったが、それまでのA氏の様子を見て、不穏の軽減・残存能力の賦活を目的に、改めて個別音楽療法セッションを開始することとなる。

Ⅳ. 方法

X年7月からX+5年2月。入院による数回の中断を含み合計97回行い、現在は終結している。月2回、約30分の個別音楽療法。セラピスト(Th)は筆者1名。施設の談話室あるいはA氏のベッドサイドにて行う。談話室は約32畳で、A氏が普段生活している療養階とは異なる階にある。A氏のベッドは4人部屋の入口に近いところにある。ベッドサイドの時には、ベッドの周りのカーテンを閉めて行った。時間帯は特に決めて

いないが、昼食前あるいはおやつ前に行くことが多かった。識字能力があるため、歌唱時には筆者が黒いフェルトペンで手書きした歌詞紙(A4)を用いる。第2期では筆者がフレットを押さへA氏が弦を弾くという方法で、ひとつのクラシックギターを共同で演奏する。音楽療法開始当初A氏に今の希望を尋ねると、「所帯を持って、人に笑われない一生を送りたい」と言っていた。

《主な使用曲》

『高原列車は行く』『トンコ節』『ゲイシャ・ワルツ』『お座敷小唄』『まつのみ小唄』『九州炭坑節』『湯の町エレジー』『誰か故郷を想わざる』『酋長の娘』『無法松の一生』『我は海の子』『おてもやん』『あんたがたどこさ』『かえり船』『寒い朝』『人生の並木路』『影を慕いて』『ドレミの歌』『忘れちゃいやよ』

V. 経過

第1期(#1~#42)

Thがクラシックギターを弾き、歌いかけることでA氏にアプローチする。#3までの様子から、A氏にはクラシックギターが合うのではないかと考え行ったところ、実際に好反応が得られたため用いていくことにした。A氏が次第に歌唱し始めると、Thは伴奏に徹する。ソフトケースに入ったギターを一瞥しただけで、A氏の目が輝き、表情がガラリと変わるようになり、セッション中は活気が見られる。そして自分が以前クラシックギターを弾いていたこと、どれほどギターを弾くことが好きで、扱いを大切にしていたか等を熱く語るだけでなく、ギターの演奏についてアドバイスをするようになる。首を左右に振ってリズムを取ることも度々見られる。日によって異なるが、hが多く聞かれても、歌っていくと減少し、終了時に再びhが表れる程度のこともあり、全くhが聞かれない日もある。hを発するとA氏に活気が見られてくることが多いが、hがひどくエスカレートしたとThが感じたことはなかった。hの時には「恥ずかしい」と、はにかむように言ったり、はにかむ表情が見られることが多い。#14の後、介護職員から、最近落ち着いて穏やかに過ごすよ

うになったと報告があった。Thに座布団を勧めたり、Thに見えるように歌詞紙を持っていくれたりする言動もある。Thのギターを弾く指を見つめていることが度々あり、A氏の右手が弦を弾くように動いていることもある。#41の後、療養部長から、A氏にギターを弾いてもらってはどうかと助言がある。

#1 眠いと言っていたがhを話すうちに活気が出てくる。Thが『東京ナイトクラブ』を歌うと「恥ずかしい」と言う。終了後はレクリエーションでカラオケを歌っている。

#2 嬉しそうに懐かしそうに歌う。節は正確で声域も広い。歌の後はhが減る。

#3 Thギターによる伴奏を開始する。「昔弾いていた、ギター好き」と嬉しそう。「トンコ節」に「子供の頃親に怒られながらよく歌った」と言う。hはほとんどない。

#4 ギターを見ると急に表情がゆるむ。「僕もギター好きやった、ギターやめてもう10年は経つなあ」と言う。首を振ってリズムを取っている。

#5 歌を始める前から、Thを見て音楽をする人とわかっている発言がある。「次の弦を弾くのが早い」「今は焦ってる」「合の手が入ってない」「わしもギター好きでやっと思ったからわかる」とThにギターの指導をし、活気が見られる。楽器や本を大切にすることを語り合う。

#6 「今は早い」「手に力はいっとる」と指導しながら、ギターを弾いていた頃の話を熱く語る。

#7 ギターや歌の話になると枕から首を高く持ちあげる。弾き始めた当初の苦労を熱く語る。

#10 「ギターの姉ちゃんや」とThに座布団を勧める。表情よく、多弁。hはない。

#11 目を輝かせ「右手は出来るだけ沢山の指で弾くほうが音が良くなる」と指導する。hがある。

#14 「三度の飯も忘れてギターに夢中になった」と話す。歌唱後「ああ気持ちいいわ」と言う。hはない。

#18 hがある。足腰を動かして体でリズム

を取るが、全体的には穏やか。Thが見やすいように歌詞紙を持っていてくれる。終了後、移乗時の痛みと苦痛の表情を見せるが、声をあげずに耐え、Thに「ありがとう」と言う。

#24 Thの指の動きをじっと観察している。少し歌うと「しんどい」と言う。ギターや歌に対する純粋な愛情や興味が言葉の端々から感じられる。セッション前と後にhがある。

#30 歌声が擦れる。歌わずに指揮をしながらか聞いていたこともある。Thによく見えるように、裏向けに歌詞紙を持っていてくれる。最近ひどい入浴拒否があるが、セッション終了後はそのまま入浴へ向かう。

#34 「ギターは弾いたことない」と言うが、首でリズムを取ってThのギターと歌を聞く。小さな声で歌い始め、次第にキーが上がってくる。hがあるが、その度に「恥ずかしい」とはにかむような表情で言う。

#35 ベッドで蒲団を被り、Thのいる方と逆の方向を向いている。拗ねて不機嫌そうな表情をしている。Thの小さな声の歌とギターの演奏が終わると、Thを見る。うるさいでしょうかと尋ねると「好きやから」とボソッと行って、再び向こうを向く。

#41 Thのギター演奏を喜び、右手が時々弦を弾くように動く。hが少々ある。

第2期(#43~#63)

座位で過ごす時間が延びており、談話室にて、A氏とThが共同でひとつのクラシックギターを弾く活動を行っていく。Thはギター演奏に合わせて歌う。車椅子にギターを乗せて促すと、A氏は右手人差し指の爪で1弦から6弦に向かってスウィープ奏法のように(一弦ずつ順に)弦を弾いた。第2期の間、A氏の弾き方は基本的にこの方法である。「怖い」「わからん」等の発言があるが、よく伺うと、爪が整っていないのでギターを痛めるかも知れない、音が悪くなってしまうかも知れないという意味合いであった。A氏はThがコードを押さえるのを見て、それがきちんとなされているのを確認してから弦を弾く。初めは全音符の演奏であったが、曲調に合わせて全音符から二分

音符や四分音符にリズムを変化させるようになり、休符を組み合わせることもある。爪で弾いているのに音質は柔らかく円い響きがしている。曲の最後の音をデリケートに美しく、消え入るように弾くことや、ランダムなアルペジオで弾くこともある。演奏時の表情は目を細めて微笑をたたえた様子を見せる。「ギター弾くのは初めて」と言うことが多くなるが、反面、食事は自立していて2本の指を結構上手に使っているとケアマネジャーから報告があり、「自分で歩けるようになりたいから運動したい」という発言が日常生活で聞かれるようになる。# 63の後、施設の行事で『高原列車は行く』のギター演奏を披露した。当日ははじめ舞台上から見る周りの空気を気にしている様子で、指がほとんど動かなかったが、Thの歌声に安心したのかいつもの調子を取り戻し始める。それからは微笑をたたえた、演奏開始前までとは明らかに違う顔つきになり、複数のパターンを組み合わせた演奏を披露する。第2期の間は第1期に比べて、hが少ない。

43 座位で過ごす時間が延びている。車椅子にギターを乗せて促すと、右手人差し指の爪でスウィープ奏法のように弾く。「弦が切れたら怖い」「わからん」と言うが、拒否はない。終了後は介護職員に「楽しかった」と話している。

45 弦が爪に引っ掛かるのが気にかかるようで「ギターが傷つく」「音が悪くなる」と言うが、逆にギターを大切にす気持ちや愛する気持ちが伝わってくる。

46 Thがコードを押さえるのを確認してから弾いている。『高原列車は行く』のラララ…の部分からはリズムを全音符から二分音符に変化させる。

48 爪を整えてから弾いてもらう。右親指と人差し指で、6弦と3弦・5弦と1弦など、Thの押さえた弦をA氏なりに判断して、選んで弾いている。

50 誘導時に上機嫌で、hがある。1～6弦ではなく1～4弦位を弾く。全音符・二分音符だけでなく、四分音符で弾くこともある。音質は円い響き。「ギター弾くのは初めて」と言う。

52 演奏の間は集中しているのが感じられる。曲の最後の音を美しく、消え入るように弾く。hがある。

53 ランダムなアルペジオで弾くことがあるが、二人の息が合わない。リズムの変化や終了部分の工夫をしようとしている。

54 開始時は不穏気味だったが、力みのない柔らかく美しい響きの音を自然に奏でられている。

55 自分は駄目だという発言や「姉ちゃん彼氏おるんか」という発言が多い。

56 誘導時・終了後はhが多い。Thの方が熱心に見すぎて自分の手元の弾き損ねが多い。リズムは3パターンを使い分けていることもある。曲の最後は丁寧にリタルダンドして響かせている。

57 4パターンのリズムを使う。「ギター弾いたことない、壊したらあかん」と言う。

60 施設行事出演の打診に「よう弾かん、2年はかかる」と言うが、ギター演奏時は活気が見られる。

61 hが多い。使い分けではなく、リズムがバラバラ。頭拍に休符が入るパターンが多い。

62 リズムが安定している。終了後A氏の部屋に戻ると「知らないところ」と言う。

63 行事出演者同士で顔合わせをしながらギターを弾く。他者の視線を気にしながらもしっかり弾くことができる。

第3期 (# 64～# 97)

尿路感染症・下腿蜂窩織炎で2週間病院に入院し、再入所する。A氏を一目見て、すでに違うステージに入っていることを感じる。病状が増悪しており、第2期と同じ方法が行える状態にないと判断し、Thからのクラシックギター演奏と歌いかけを中心に行う。次第に体力・認知力に低下を感じるが増え、体調(腸の状態)も悪化していく。「家に帰る」「電車に乗る」「立つ」など、突然の不穏・不明言動が目立つようになる。A氏の歌唱時の声量は乏しくなっていくが、ギターに目を輝かせることや「(歌は)好きやもん」「気持ちがすっとした」という発言は見られており、表

情や機嫌は相変わらず良好である。# 89では、目を輝かせて食い入るように歌詞紙を持っていたA氏が、2番になるとひっくり返し、筆者に見えるように持って、満足そうな表情を見せる様子があり、同様の行動によるThへの心遣いも続いている。「お腹が空いた」という発言が度々聞かれるようになり、食に関する話題に対して非常に反応が良い。食事は食べこぼしもなく自立している。hは第2期同様に聞かれることがあった。# 97の後、再入院となり、セッションを終結する。

64 Thのギターと歌を聞いて上機嫌。hが少々ある。共に歌唱するが、声量が乏しく、高い声が出ない。終了後介護職員とホルモン焼肉の話に目を輝かせ「食べたい、おいしい、大好き」と話している。

65 A氏と筆者が共に文字を見ることができるよう歌詞紙を持っていてくれるが、視力が弱っているのか文字が見えにくそう。

69 安定して声が出ているが、曲が終わる度に集中が途切れる。hが度々ある。

76 体力的にしんどそうで、1フレーズのみ小さな声で歌う。「ここへ来て得した」「気持ちがすっとした」と言って戻る。

79 ギターの音を聞いて表情が明るくなり、醸し出す雰囲気は軽くなる。次第に曲の大部分を共に歌う。食べ物が出てくる替え歌から、地方の名物や祭りの話になり、表情良し。

85 5曲全て、全フレーズ歌唱し、明るく機嫌が良い。

90 はじめ、文字が「見えない」と言う。自分の年齢を「100超えた」「60」「90」と言う。

92 「しんどい、帰るわ」と言う。お腹からグルッと大きな音がする。この頃から腹部膨満が毎日のように続くようになる。

94 「朝から何も食べてない、お腹空いた」と顔を歪ませ何度も訴える。曲の間は集中し、歌詞紙を持って頭を揺らしてリズムを取っている。終わると「持っているのも腹が減る」と言う。

95 4曲全てギター伴奏に合わせて歌う。声は小さく細いが、音程は正しく、首でリズムを取っている。「(歌は)好きやもん！」と笑顔を見

せる。

96 機嫌が悪いが、筆者のギターと歌は頷いて受け入れ、聞いている。1曲ごとにみるみる表情が緩み、明るくなる。hが少々ある。

97 ギターの音に目を輝かせる。「今のはちょっと違うなあ」とThの演奏を指導し、A氏の指もギターを弾くように動いている。歌詞紙を見て「お、この歌好きや」と言って歌唱するが、声は弱く、かすれている。hが度々あり、機嫌が良い。

VI. 考 察

1. hについて

A氏の発言「h」は、一般的には性的な言葉である。その具体的な内容は、「姉ちゃん好き」という軽いものから、際どい発言まで色々ある。しかし、その言葉の内容を吟味する姿勢のみでは、このA氏にとっての「h」の意味を考えることを妨げてしまうように思うのである。A氏の発言「h」は、どのような意味を持つものなのかを考える時、以前、ある高齢女性が筆者に語った言葉を思い出した。個人的に親密な場面になると時々エッチな会話をするその女性は、「(エッチな話をするのは)罪がないやろ? みんなが面白可笑しくしてられるやん? こんな話をして、気取ったり嫌な顔する人は、もうそれまでの人や」と言い、大人の遊び心や心の余裕がわからない人とは、今後付き合うのは御免だという判断ができるのだと説明した。おそらくA氏も、同様のことを思っていたのではないだろうか。なぜならば、A氏が「h」を言う時にはにかんだ様子や雰囲気から、筆者はそれを卑猥なもの(相手を貶めようとしているもの)だとは感じなかったからである。筆者が感じていたのは、相手を楽しませるため、相手をいい気分にさせるため、相手を褒めるために、A氏がそれらを発しているということだった。色香を漂わせた大人と大人の駆け引き(やり取り)、相手の度量を試し合う上質な大人の遊び。それは実際に性的行為をすることは全く次元の違うものとして筆者には伝わってきた。筆者はA氏の「h」を聞いて、「あなたは素敵なんだ」「い

い女だ」と認められ、褒められている気がした。また筆者はA氏のセッションに行くことが嬉しく、楽しみであり、自分がより美しく輝き、磨かれて、急速にいい女になれる気がした。A氏も、優しさ・気遣い・包容力・サービス精神に溢れ、相手を喜ばせていい気分させることができるという役割を担っていた。筆者の歌声とギター之音がA氏の表現（hを含む）を引き出し、A氏の表現が筆者を磨き、その筆者がまた歌声とギターでA氏に返す。セラピーの場には、色香が溢れていた。しかしそれはセラピーの場の中だけであった。A氏は普段から男女の区別がはっきり認識できていた。そして、セッション以外では筆者に何一つ性的関心を示すことはなかった。筆者が夫人について尋ねると、「ババア」「姉」などと言っていたが、認知的に理解が不十分であったことを差し引いても、それは明らかに照れ隠しであった。また、夫人が面会に来ている時に、職員や筆者にh発言や行動をすることもなかった。このA氏の能力がなければ、このセッションはおそらく不適切な変化をもたらし、中断を余儀なくされていたのではないと思われる。これについては、改めて後述する。

性的な側面が人間の根源的な生命力であることは、一般的に暗黙に認知されていることではあるが、現在医療現場や施設では、性的な言動は率直に言うとはタブー視され、厄介なものとして扱われていることが多い。それは現代社会の諸事情を考えると、致し方ない。しかし一方でその考え方は、人間の根源的な生命力を否定することも意味している。社会的事情とクライアントの生命力、これらの要素のバランスをどのように取るのか、性的言動をいわずに助長させる誘惑に終わらず、セラピーとしてどのようにその生命力を顕現させるのか。これはセラピストの臨床姿勢や人間観にかかっている非常に難しい問題である。その判断時の根拠には「セラピストがどのような考え方をもちセラピーに臨んでいるか」ということが大きくかわってくると思われる。

2. クラシックギター共同演奏で起こっていたこと

A氏の指が奏でるギター之音色には、その楽器

が本来持つ美しい響きを大切に思う気持ち、人や物だけでなく音楽を含め世界に存在する美しいものすべてに対する優しさや愛が表現されていたように感じられた。筆者がフレットを押さえてA氏が弾き、そして筆者がその音に合わせて歌うという、演奏を完成させる共同作業では、A氏の包容力や思いやりが表れていただけでなく、プロの演奏家をはじめ音楽を演奏する人間によく見られる真剣で聖なるものに対峙するような面持ちと、形容しがたいほどの美しい微笑、満ち足りた表情が見られていた。筆者がフレットを押さえて準備し、A氏がそれを確認して弦を弾く。そしてその音に相応しいと思う声、A氏の奏でる音に最も合うと思われる、自分が出し得る最も美しい声で筆者が歌う。A氏はその声に触発もされるが、何より筆者の歌をより美しく生かすために、さらによい演奏をしたいと思いギターを弾く。筆者はA氏の演奏を更に生かしたいと思い、準備と歌に心を砕く。このように、互いが互いを生かし合い、思い合い、共に「更なる美しいもの」に近づくための行為がなされていたのではないだろうか。

この時A氏は、己の持つ生命力の根源を、性的な言葉ではなく、音楽という形で表現していた。施設生活・全面的介護の状態の中、普段はその力を表現する場を失ってしまっているかのようにも見えていたが、A氏のその輝きや強さは失われていなかったのである。この共同演奏では、A氏と筆者が二人で一つになるために、ギターという楽器を含めて一つになるために、ギター演奏と歌を通じて世界と一つになるために、あらゆる面で互いが互いを助け合い、補い合い、交信していたと考える。片方だけでは不完全であることを深い部分で認識し、全体に近づきたいという方向で一致していたのではないだろうか。そして、その共同行為による一体化・合一・全体への道、それによって生まれる「時」が、「美」であり「聖」であるからこそ、A氏は前述のような表情や雰囲気を見せたのではないだろうか。音楽は、音楽を行う中で、このようなことを自然に引き起こす力を持っている。これが音楽の特質のひとつであると思われる。加えて、楽器の持つ個性も効を乗じている。ギターという楽器の形は、女性の体形に

似ていることと、それを抱えて弾くことから、女性として考えられることも多い。またギターのように多くの弦をかき鳴らす楽器の音は、第2チャクラ（性を司る）に対応する音であるとされている。このような要因も、A氏と筆者の音楽に影響を及ぼしていたと考える。

3. エロス（エロース）について

ギリシャ神話にあらわれるエロース（キューピッド）、エロースとは何であるのかを記したプラトン、古事記などにあらわれるアメノウズメノミコト、フロイトが考えたリビドー。洋の東西を問わず取り上げられてきた視点を考え合わせると、エロスとは恋・愛・性、それらを求め、つながりたいと思う、抗いようのない性質を持つ、人間の根源的生命力の源であると筆者は捉えている。特にプラトン¹⁶⁾は天地万物のエロースについて述べる中で「つまり音楽は…（中略）…これらすべてのものの内に互いに対する恋と協調をつくり込むことによって、同調関係を組み入れるのである。そして音楽とは、あらためて言えば、調和とリズムに関する恋現象の知識にほかならないのである」と記している。世間一般ではエロスを性愛のみに限定して扱われる昨今であるが、本来音楽は、恋・愛・性の側面を持つもの、それらをよく表現し得るものなのである。そしてここで取り上げられる愛とは、宗教学にならって聖なるものと俗なるものに分けてとらえることが適当であり、仏教における慈悲と愛染、キリスト教におけるアガペーとエロスなどを軸として、筆者がA氏との音楽療法セッションの場において感じたエロスを更に考察したい。

ギターの共同演奏や筆者のギター伴奏・歌において、どのように、どのようなエロスが現れていたのか。おそらく、A氏のギター之音それ自体が、筆者の歌声が、そして前述したような、互いが互いを生かし合い、思い合い、共に更なる美しいものに近づくための行いが、幾重にも重なって存在するエロスであったと考える。そして、歌声やギター之音に姿を変えたエロスが、セラピーの場を包み込み、A氏と筆者を包み、「むすび」つけていたのだろう。A氏のエロスが発せられ、それを

受けてまた筆者がエロスを発する。その交感・交信の繰り返しで、互いが互いを触発し、生かし合い、美しい部分を伸ばしていったのだと考える。エロスは目には見えないが、それは深みや奥行きとして感じられるものだと思う。そのように感じられることが、頭で考えることよりも、より根源的なものの正体なのではないだろうか。エロスは言葉の中にも現れるが、音楽の中には、よりそのままの状態、性質のまま、映し出され、表現されるのではないだろうか。それは、意味の世界を超えたところで生じるものである。そしてそのエロスは、マインドではなく、互いのハートや魂に響き合い、屈き、実感のあるものとして経験され、感じられるのではないだろうか。

この、筆者がA氏と過ごす中で感じたエロスとはどのようなものだったのであろうか。聖俗という観点で考えるとき、そのエロスはどちらであると感じていたのだろうか。筆者はクラシックギターの共同演奏について述べた際に、「美」「聖」という感覚を持ったことを記した。しかし果たしてそれだけであったのであろうか。それを考える前に、筆者が感じた音楽におけるエロスの性質について「むすび」という視点から考察してみたい。

4. 「むすび」について

鎌田⁵⁾は『古事記』冒頭に登場する「むすび」の神々について言及し、古語辞典と本居宣長『古事記伝』を引いて「むすび」の語源に迫っている。むすび（産霊）は息子や娘の「むす」も苔生す「むす」も同じ語源であり、その「むす」力を持つ「ひ」とは、「万物を生みなす不思議な霊力」、すなわち「物の成出る」はたらきをする「物を生成することの靈異なる神霊」を意味する。つまるところ、「むすび」とは自然の生成力を言い、「産霊の神」とはそうした自然の生成力をいうのであると述べている。そして、異性間、異文化間、異文明間、異次元間を結びつける創造的な跳躍が「むすび」という生成力や習合力として発現してきたと総括できる、と述べている。ここで言う習合とは、異なったもの同士を総合・調和することである。結合（結び合わせる）とは意味合いが違うのである。例えば赤い紐と青い紐を結び合

わせれば一つの紐になるが、それぞれの紐は独自の性質を失うことなく一つになっている。しかし、赤い紐と青い紐を鍋で煮詰めて溶かし、新たな色と形の繊維製品を作り出せば、元々の独自の性質は変容した一つのものになる。前者が結合で後者が習合の例え話である。上手い例ではないが、筆者はこのようにとらえており、生成力（プロダクティブな力）と異なるもの同士を結び合わせる習合力を持つ「むすび」の考え方は、筆者が考える音楽のエロスの、性質のひとつを表現するために、ふさわしいものに思われる。筆者がA氏と共に体験した音楽療法の場で起こっていたと思われることが、このような要素を含んでいたと考えているからである。

共同演奏の中でA氏と筆者は、ギター演奏と歌で一体化し、ひとつ（全体）となっていた。それはまるで、音楽（音）に満たされた時間空間に、二人と楽器が融けて存在しているような、どこからどこまでがA氏で、どこからどこまでが筆者で、どこからどこまでがギターなのかわからなくなるような感覚であった。しかしそれと同時に、A氏は確かにA氏であり、筆者は筆者であり、ギターはギターであるという各々の存在を失うことはない明確な個の状態、互いに結びついているという感覚もあった。習合と結合が同時に起こるといふ、本来相反するもの矛盾するものが同時に起こっているという不思議な感覚を体験したのだ。このように本来異なる状態を同時に起こさせるものが、そして異なるものが存在する時間空間に満ちていて全てを結びつけているものが、それでいて各々の存在に更に光を与えるものが、音楽の特質なのではないだろうか。筆者が感じた音楽におけるエロスとは、そのようなものであると言えるのではないだろうか。これは音楽の「むすびの状態」であり、その根源的エネルギーとなるものが、音楽のエロス（愛・生命力）であると考えている。

5. エロスの聖俗と様々な表れ方

『心理臨床におけるからだ』の中で小原¹²⁾は、Lowenの「セクシュアリティと切り離されたスピリチュアリティはただの抽象概念にすぎず、また、セクシュアリティもスピリチュアリティから

分断されれば単なる肉体活動に過ぎない」「セクシュアルである以上にスピリチュアルになることはできない」という言葉を引き、「生は性にして聖なり」というが、「生」は「性」と「聖」を表裏とするコインのようなものかもしれないと述べている。

古来より男根や女陰は、神社のご神体として祭られ、原始宗教でも神聖なものとして崇められてきた。また、男女の営みから生命が誕生してくる過程は、計り知れない神秘と不思議で満ち溢れている。新たな生命を生み出す元になる「性」は、人間の神秘的な生命力の根源であり、畏敬の対象である。人によって何が聖で何が俗と考えるかが異なるという問題はあるが、「性」は「聖」的性質、人智を超えたものを感じさせる畏敬の念を包含している。これが、性を追求していくと聖に行き着くという考え方に繋がっていくことは、例えば仏教のいくつかの宗の考え方にも現れている。筆者がA氏の中に見たエロスは、このようなものであったと思われる。筆者はA氏の性的側面（発言h）に「聖」を見たということである。しかし、そこが終点ではないようにも思われるのだ。

A氏のエロスは、象徴的に形を変えて表れていたと考える。第1期は言葉を通したエロス、第2期はギターを通したエロス、第3期は食を通したエロスである。鎌田⁹⁾は、加藤との対談の中で、食欲と性欲は結びついており、人間には根本に食欲と性欲がある、そしてこの2つをどう完成させていくかが靈性を完成させるための二柱になると述べている。この点からも、A氏がエロスに溢れた人物であったと考えられる。

6. A氏のセラピーが効果的に進んだ要因

筆者はA氏のセラピーが効果的に行われた要因を大きく2つ考えている。一つはA氏の認識力とThの判断、もう一つはA氏のエロスを見る筆者の視点である。

音楽はエロスの要素を持っている、エロティックなものであるが、それは両刃の刃である。音楽が誘惑し、過剰に不適切な言動をエスカレートさせる方向に働くのか、癒しに向かうのかは、見極めが肝心である。もしこの音楽療法セッションが

A氏を誘惑する方向にのみ働いていたならば、何らかの不適切な問題を引き起こし、中断することになっていたであろう。では何故このセッションが継続でき、セラピューティックな場が保てたのであろうか。それは、A氏が言語のレベルと非言語のレベルで、筆者をセラピストとして認識できていたからだと考える。#5では、訪室するとA氏は不機嫌で、hを乱発していたが、筆者が「何も聞こえませーん」と冗談まじりに聞き流すそぶりをしていて、「耳が悪くてよう音楽やるとるわ」と言っていた。まだ音楽を何も開始していないにもかかわらず、筆者が施設の中で音楽をしている人であると認識できていたのである。そしてたとえ今、色っぽい歌をうたっているとしても、それは筆者個人の表現ではなくセラピストとして行っていることであり、歌が終わればセラピストという立場に戻る人だと、認識できる能力があったと考える。その文脈の中でA氏は筆者と人間関係・信頼関係を構築し、その上で遊びや上質な大人のやり取りとしてのエロスを楽しむことができたのだと考える。また筆者自身もこのバランス感覚に気を配り、A氏の表情や言動の温度を感じ取り、A氏を不適切な方向に導かない加減を見極め、発言・歌い方・回数などを調整していたと考える。

7. エロスの俗から聖への転換、そして全体性

A氏は普段介護を受ける中で、自らのエロスの俗なる面（性的側面）を見せていた。そして施設の中でA氏の発言は、それを言われた相手から否定的な扱いをされていた。しかし前述したように、筆者はA氏の発言hや振る舞いの奥に、聖なる面を感じ取った。そして筆者は音楽を用いて俗の向こうにある聖に向かって語りかけた。やさしく穏やかで、愛らしく、それでいて大人の女性としての品を感じさせるように、この世のものではないような感じで、その場を包み込むように歌った。それまでの他の人とは異なる反応に触発されて、A氏は俗なる面を聖に転換させ、歌唱やギター演奏といった音楽的表現による、聖的な表現を見せ始めた。だが筆者はA氏の俗なる面を否定した訳ではない。俗は悪ではない。俗には俗の性質や意

味がある。筆者はA氏を、エロスの聖と俗を含んだ全体として、それをA氏その人の全体、愛と生命力としてのエロス全体として捉えるようになった。そのように捉えてセッションを継続した結果、A氏は施設を去る最後まで、生命力（エロス）を枯渇させることなく過ごすことができたのではないだろうか。筆者はエロスが色香や香気となって現れると考えるのだが、それはその人の質・気品・魅力・人を惹きつける力である。とりわけ筆者は、人生を長く生きてきた高齢者のエンド・オブ・ライフケアにおいて、このような視点が重要だと考えている。

吉田²¹⁾は、ブーバーが忘我的陶醉体験から日常性に転向した経緯について述べる中で、「[宗教的なもの]は、俗から聖を区別し、日常から非日常を区別した特別な時空で生じることではない。…(中略)…今この、足下の「日常性」の只中に生じる。目の前に現前する一人ひとりの人と向き合う日常のなかに、聖なる神秘を含んだ一切がある」と述べている。また、異なるもの同士がむすびつくことは、予測不可能な無限の可能性や創造力を発揮することでもある。 $1 + 1 = \infty$, $1 + 1 + \alpha$ (音楽) = ∞ である。セラピーの場で、A氏は自らのエロス（愛・生命力）を生き、それを強く輝かせていた。筆者とA氏が体験した世界は、はたから見れば平凡な音楽の時間だった。しかしその中に宿っていたのは、「日常の中にある無限の聖性」であったとも言えるだろう。今回の筆者の体験は、万人に通じるものではない。あくまでA氏と筆者に特有の事である。しかし筆者が行ったこの症例においては、エロスというものが非常に重要な要素であったことは間違いない。

VII. おわりに

筆者が行ったA氏との音楽療法において、音楽のエロスの要素とエロスについての筆者の視点、つまり、より原初的な観点からエロスを理解する姿勢を持ったことが非常に重要であったと考える。また筆者はA氏が行ったクラシックギターの共同演奏と歌を通して、エロスに裏付けられた音楽の「むすびの状態」（習合と結合が同時に起こる）を

経験した。筆者はA氏の性的発言の向こうに聖性を感じ取り、音楽を用いてそこへアプローチした結果、そのエロスは俗（性的側面）から聖へと転換した。さらに筆者はA氏の中に、聖俗を包含した全体性としてのエロス（愛・生命力）を見出した。それは聖俗以上に様々なものが含まれた「日常における無限の聖性」でもあった。筆者がこのような視点を持ったことが、A氏とのかかわる際の対面姿勢を構築させ、セラピーとして、音楽のエロスをより有効に活用させることにつながったと考えられる。

〈付記〉 本稿は第41回日本芸術療法学会において発表した内容に加筆したものです。A氏との出会い、育和会老健ひまわりの皆様、そして多くの示唆を与えてくださった山中康裕先生、北本福美先生に心から感謝いたします。

文 献

- 1) Brown, N. O. (秋山さと子訳)：エロスとタナトス。竹内書店新社，1970.
- 2) Chamberlain, B. H. (Aston, W. G. annotations)：Translation of "Ko-ji-ki", or, "Records of ancient matters". Edition Synapse, 2000.
- 3) Ferrer, J. N.：What Does It Mean to Live a Fully Embodied Spiritual Life? International Journal of Transpersonal Studies, 27：1-11, 2008.
- 4) 古井博明：「ロゴス」と「エロス」：ある強迫症者の精神療法を通して。精神分析研究, 41 (1)：44-52, 1997.
- 5) 市川安司・遠藤哲夫 (石川泰成編)：荘子 (新書漢文大系 12)。明治書院, 2002.
- 6) 井筒俊彦：意識と本質。岩波書店, 1991.
- 7) 鎌田東二：神道のスピリチュアリティ。作品社, 2003.
- 8) 加藤 清・鎌田東二：霊性の時代。春秋社, 2001.
- 9) 河合隼雄：心理療法序説。岩波書店, 1992.
- 10) Lowen, A. (中川吉晴・国永史子訳)：うたと身体。春秋社, 2009. (甦る生命エネルギー, 春秋社, 1995.)
- 11) 宮野素子：視線とエロス—対人恐怖症女性例へのまなざし。心理臨床学研究, 18 (2)：180-190, 2000.
- 12) 目幸黙僊・黒木賢一編：心理臨床におけるからだ。朱鷺書房, 2006.
- 13) 日本ユングクラブ：プシケー第23号, 新曜社, 2004.
- 14) 西田幾多郎：善の研究。岩波書店, 1950.
- 15) 追手門学院大学東洋文化研究会：エロスの文化史。勁草書房, 1994.
- 16) プラトン (朴一功訳)：饗宴。京都大学学術出版会, 2007.
- 17) 竹内青嗣：エロスの世界像。講談社, 1997.
- 18) 上野圭一：わたしが治る12の力。学陽書房, 2005.
- 19) 梅原 猛：古事記。学習研究社, 2001.
- 20) 山中康裕：心理臨床学のコア。京都大学学術出版会, 2006.
- 21) 吉田敦彦：プーバー対話論とホリスティック教育—他者・呼びかけ・応答。勁草書房, 2007.

Summary

Jpn. Bulletin of Arts Therapy, 41 (2) : 43-53, 2010

Importance of Eros in Music Therapy

Yuka Arakawa*

The purpose of this study is to express the author's view on the use of Eros in music therapy and the importance of Eros as its element. During the therapy session the author was singing while playing classical guitar along with her client, both using the same instrument simultaneously. This session made her experience the "musubi" state (the feeling of synthetic harmony and connected diversity occurring at the same time), which was caused by Eros. The author felt the sacredness in the sexual remark of the client, and approached it through the music, which eventually transformed the profane nature of Eros in the client into the sacred. Furthermore, the Eros as a wholeness (love and vital force) found by the author in her client embraced both the sacred and the profane. The author concludes that this approach to the Eros as a wholeness embracing both the sacred and the profane helped her client in this particular case.

Key words : music therapy, Eros, "musubi" (force of spiritual production), the sacred and the profane, wholeness

* Ikuwakai Himawari Geriatric Health Service Facility, 2-9-31 Tatsumi-nishi, Ikuno-ku, Osaka-shi, Osaka, 544-0012 Japan.